

大学横断型デジタル・リテラシー教育の構築に向けた JADH SIGLITH の取り組み

小風尚樹¹

概要:2020年11月に発足した日本デジタル・ヒューマニティーズ学会「人文学のための情報リテラシー」研究会(JADH SIGLITH)では、国内外の教育動向の調査をはじめとする活動を通じて、人文学全般およびデジタル・ヒューマニティーズにおける情報リテラシーのあり方を習得できるカリキュラム案を作成することを目指している。本発表では、2021年3月に開催した同研究会主催の若手研究者発表セッションの企画・実施段階で得た学びを共有したい。同セッションでの狙いは、日本国内におけるデジタル・ヒューマニティーズ教育体制の整備がまだ充分ではないことを背景に、デジタル・ヒューマニティーズ分野における研究実践に取り組んで日の浅い若手研究者による発表に対して、各分野で活躍する先達の研究者による指導的コメントを寄せることであった。言い換えると、学会発表の形式を取った公開指導会を企画したのである。その際、コロナ禍におけるオンライン開催だったことは、日本各地そして海外在住の研究者にコメンテーターとして参加していただくための後押しとなり、結果として大学横断型指導環境を実現することができたと考えている。ただし、前述のような指導的機能を学会発表に持たせることは困難を伴うものでもあり、その意図を発表者以外の聴講者に充分告知することができなかったという反省もある。本発表では、これらの反省を踏まえつつ、今後の活動を展望したい。

キーワード: デジタル・ヒューマニティーズ教育, JADH SIGLITH, オンライン学会, 学界における多様性

1. はじめに

本発表は、第127回人文科学とコンピュータ研究会発表会の企画セッション「コロナ禍を通して得た大学教育／人材育成に関する知見」の一環として、筆者が主査を務める日本デジタル・ヒューマニティーズ学会「人文学のための情報リテラシー」研究会(Japanese Association for Digital Humanities, SIG: digital Literacy for the Humanities. 以下、JADH SIGLITH)の活動を基にポストコロナ時代の教育・人材育成の環境や方法について、多様な学会参加の重要性とジェンダー問題を絡めて試論的に展望するものである。

2. JADH SIGLITH の位置づけ

2.1 会の設立背景とねらい

まず、情報保存の意味も込めて、JADH SIGLITH のねらいについて、その設立趣意書[1]から確認しておきたい。

2020年11月20日、JADH2020開催に先立ち、ワークショップ「人文系大学院における情報リテラシーの在り方」が開催された。ここにおいて、人文学の教育研究における情報リテラシーを確立することが喫緊の課題であることが確認された。その内実については、固定的なものであるよりもむしろ、デジタル技術の急速な進展や人文学の多様なニーズにあわせた柔軟かつモジュール的なものとなることが望ましいこと、情報リテラシーが単なる読み書き技術にとどまらず、人文学の新たな基盤となりつつあるデジタルメディアに対する学問的な態度決定の問題で

もあること等が確認された。また、こうした状況に足場を形成するためのよりどころとして「Invisible College of Digital Humanities」が大向一輝氏(東京大学)により提唱された。

このような課題は、まさにJADHが取り組むべきものであることから、このたび、「人文学のための情報リテラシー」研究会(SIG: Digital Literacy for the Humanities)を設立し、今後の議論の場を提供することを提案する。具体的な活動としては、議論の場を形成するための各種SNSでの情報発信、情報交換のための会合、アウトリーチのためのシンポジウム開催等である。

なお、類似の課題に取り組む可能性のある学協会が他にも様々に存在することから、本研究会の活動は、必要に応じてそれらと連携することを含むものとする。

引用文で言及されているJADH2020のプレワークショップでは、大阪大学・東京大学・千葉大学におけるデジタル・ヒューマニティーズ教育の状況報告に始まり、その上で今後の教育環境の整備などに関する議論が展開された[2]。この趣旨書のうち、本発表でとくに注目したいのは、大向一輝が指摘した「Invisible College of Digital Humanities」の発想である。後述のように、日本国内における教育整備が充分でない状況で、時間的・空間的制約を超えて教育活動を展開することは、目指すに値する達成目標だと考えるからである。

¹ 千葉大学
Chiba University

2.2 DH 教育に関する国内外の概況

近年、日本各地の大学・大学院において、デジタル・ヒューマニティーズ教育関連の求人が増えつつあり[a]、またポスト設置には至らずとも関連講義が開設されるようになってきた。この状況下で JADH SIGLITH が課題として考えているのは、新しい教育プログラムを考案する際の日本語の参考情報が十分に豊富ではないことである。このことは、関連領域である人文社会系分野におけるデータサイエンス教育の教材について、たとえば滋賀大学や東京大学によるものが参照可能であること[5][6]、情報処理学会によるデータサイエンティスト育成のためのカリキュラム案[7]が公開されていることなどと比べられたい。

海外におけるデジタル・ヒューマニティーズ教育に関する参考情報も豊富である。[8]や[9]を手にとってみれば、講義の中にデジタル・ヒューマニティーズ的手法をどのように取り入れるか、シラバスをどのように設計するか、そして実際に公開されているシラバスの情報を得ることもできる。また、推奨参考文献の一覧を公開する試み[10]や、どの国・地域でどのような教育プログラムが行われているかのリスト[11]など、デジタル・ヒューマニティーズ教育に関する様々な種類の情報が豊富に蓄積されていることがわかる。

他にも、コロナ禍以前に始まった取り組みではあるものの、eラーニング型 DH 教育の事例として、ハーバード大学の MOOCs を中心とした修了証つきプログラム[12]が注目される。同プログラムでは、DH に関する様々な分野の専門家へのインタビュー動画の視聴や課題文献の読解、理解度を確かめるクイズ、構造化テキストを例にほかの受講者の演習課題を採点する課題など、随所に工夫が凝らされたプログラムになっている。何より JADH SIGLITH のねらいに照らし合わせて重要なのは、DH 教育が時間的・空間的制約を超えて展開され始めているという事実である。

3. JADH SIGLITH の取り組み

3.1 若手研究発表セッション

前述の通り、日本国内では DH 教育体制の整備はまだ充分には進んでいない。このような事情に鑑みて JADH SIGLITH では、DH 的手法を研究に取り入れて日が浅い日本国内の若手研究者に対し、各分野で活躍する先達の研究者による指導的コメントを寄せる機会をつくることにした。言い換えると、学会発表の形式を取った公開指導会を企画したのである。コロナ禍での開催ということで、Zoom を用いた同時双方向通信形式をとった。この企画の背景には、イギリスのロンドン大学歴史学研究所(Institute of Historical Research)のデジタル・ヒストリー講座がその活動の一環として開催している、大学院生による研究発表パネル[13]があったことをここに付言しておきたい。

a) 筆者の本務校である千葉大学を中心に展開されている卓越大学院プログラム[3]もこの流れの一環に位置づけられる。2018年時点における日本

若手研究者のキャリアアップに少しでも貢献しつつ、教育的効果を高める意図で、発表応募者のテーマに詳しい先達の研究者からのアドバイスを質疑応答の冒頭部分に必ず配置するようにした。参考までに、当日のプログラム[14]を以下に示す。

1. 七星純子 (千葉大学大学院人文社会科学部研究科)
「若年女性農業従事者の綴りの言説分析: 雑誌『農業千葉』の表紙を飾った女性たちは何を綴ったのか」
コメンテーター: 村井源 (公立はこだて未来大学)
2. 山下泰生 (神戸大学大学院人文学部研究科)
「ケーフェンヒューラーの『日記』の網羅的分析に向けて: テキストマイニングを用いた全体把握の試み」
コメンテーター: 山田太造 (東京大学史料編纂所)
3. 長野壮一 (フランス社会科学高等研究院)
「GIS を利用したフランス都市政策思想史研究のための予備的考察: 共産党市政期ジュヌヴィリエにおける住宅供給事業を例に」
コメンテーター: 後藤真 (国立歴史民俗博物館)
4. 樋口諒 (日本学術振興会特別研究員 PD (金沢大学))・村田光司
「三次元デジタルアーカイブによるギリシャ・ビザンティン聖堂遺跡群の研究資源化」
コメンテーター: 熊倉和歌子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
5. 田辺まりか (大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻)
「日英機械翻訳における日本語省略表現訳出分析と事前学習モデルの改良: Wikipedia 日英京都関連文書対訳コーパスを用いて」
コメンテーター: 村井源 (公立はこだて未来大学)
6. 伊藤静香 (千葉大学大学院)
「近世日本における異国情報受容の分析: 天竺徳兵衛渡海譚のテキストマイニングを通じて」
コメンテーター: 山田太造 (東京大学史料編纂所)
7. 高倉優理子 (慶應義塾大学理工学部訪問研究員)
「音響分析・合成を伴う作曲過程の視覚解析」
コメンテーター: 藤永一郎 (マギル大学)
8. 河合竜太 (同志社大学大学院文学研究科博士後期課程)・東風谷太一・鈴木健雄
「既存のデジタル・アーカイブとツールを活用したドイツ史研究の可能性と課題: 社会ネットワーク分析の視点から」
コメンテーター: 吉賀夏子 (佐賀大学)

国内の DH 教育の全体像については、[4]に詳しい。

9. 阿部晃平 (立教大学大学院)

「Tropy と TEI を用いた未校訂史料の構造化と Excel による可視化」

コメンテーター：永崎研宣 (人文情報学研究所)

上記プログラムのうち、とくに注目したいのは発表者とコメンテーターの所属の地理的広がりである。国内外のさまざまな場所から学術コミュニケーションが取れたことは、オンライン学会ならではの利点であった。半日のイベントとはいえ、JADH SIGLITH 設立の際に目指していた大学横断型の教育環境を実現できたと考えている。

3.2 課題

一方で、いくつか課題も見られた。まず、発表者とコメンテーター以外の参加者による発言をある程度制限せざるを得なかったことである。会の性質上、教育的効果を高めるために事前に依頼していたコメンテーターからの発言を優先したため、すべての参加者の積極的参加を促すことのできる環境ではなかった。この点については、事前の告知・説明が充分ではなかったと反省し、今後のイベント開催の糧としたい。

4. おわりに：学界の多様性にむけた考察

他にも、一般的なオンライン学会の課題として、発表時の聴衆の反応が表情などから把握しにくいことや、身振り手振りを交えた微妙なニュアンスの伝達がオンラインでは比較的難しいことも挙げることは可能である。

しかしながら、オンライン学会にしか実現できないこともある。前述の JADH SIGLITH のイベントのように、地理的な制約を容易に超えた学会参加もそのひとつである。ほかにも、2020 年に ADHO が主催したデジタル・ヒューマニティーズ会議のように、事前にレコーディングした研究発表を聴衆が好きなタイミングで視聴しておき、決められた時間になって質疑応答が行われるという非同期型の学会運営も実現可能である[15]。

非同期型の学会運営の利点は、参加者に対する時間的拘束を緩和し、たとえば休日に行われる質疑応答に向けて平日に発表準備を事前にできるように時間を配分するなどの工夫をすることで、結果的に多様な参加を促すことができることであると考えられる。近年のデジタル・ヒューマニティーズ学界の国際的な関心事として、参加者・実践者の多様性を確保することが挙げられる。欧米の英語圏を中心とする研究者・組織だけでなく、言語的・文化的な広がりを持たせようとする意識は、ADHO 内の Multi-lingualism & Multi-Culturalism Committee[16]の存在や、JADH も含めた各国のデジタル・ヒューマニティーズ学会の設立に具現化されてきた[17]。

この潮流に加えて注目したい学界の多様性の要素は、ジェンダーである。Amy Earhart らは、2006 年から 2015 年ま

での *Digital Scholarship in the Humanities* 誌の大会特別号における引用状況を分析したところ、図 1 に引用したようなジェンダー間の偏りが明らかになった [18]。

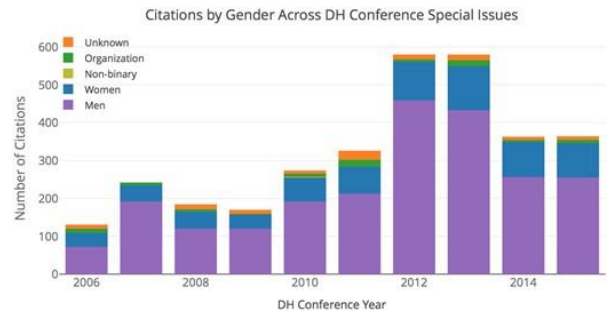


図 1 Earhart らによる DSH 誌の引用状況におけるジェンダー不均衡を表したグラフ

Figure 1 Graph showing Inequality of the Citational Practices in the *Digital Scholarship in the Humanities*' Conference Special Issues, by Earhart et al.

もちろん、ジェンダー不均衡の問題には、複合的な要因が考えられると思われるが、本発表では学会運営のあり方に注目してみたい。前述の DH2020 のように、時間的拘束の少ない非同期型の研究発表により発表者・参加者の属性にどの程度の変化があったのかについてはまだ調査できていないが、たとえばある女性研究者の個人ブログではオンライン学会の利点として、育児と研究を両立させやすいことが挙げられている[19]。この指摘は、男女問わず育児や介護などに従事する研究者の学会参加・研究活動の継続性を考察する上で重要であると思われる。たとえば医学界では、出産・育児や家事の負担が原因でキャリアアップが難しい女性医師の労働環境の改善に向けた提言がなされているが[20]、この問題は Earhart らが図 1 で指摘したデジタル・ヒューマニティーズ学界におけるジェンダー不均衡の現実と相通ずるものがあると考えられる。

様々な理由でオフライン学会に参加することが難しい研究者に対して、多様な学会参加のあり方を確保するように手配する必要性は、コロナ禍におけるオンライン学会の経験から改めて認識したいことではないだろうか。筆者も、JADH SIGLITH の活動を展開する中で、学会運営・研究環境の多様性の確保に向けた取り組みを設計していきたい。

謝辞 JADH SIGLITH の設立、定例委員会の開催、若手研究者発表セッションの開催にご尽力・ご協力くださった永崎研宣先生、大向一輝先生、田畑智司先生に謝意を表します。

参考文献

[1] 「「人文学のための情報リテラシー」研究会 (SIG: Digital Literacy for the Humanities) 設立のお知らせ。」

- <https://www.jadh.org/DiLiH/>, (参照 2021-08-03).
- [2] “人文系大学院における情報リテラシーの在り方.”
<https://jadh2020.lang.osaka-u.ac.jp/workshop/>, (参照 2021-08-03).
- [3] “千葉大学 卓越大学院プログラム アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム.”
<https://jinbun-takuetsu.chiba-u.jp/top/index.html>, (参照 2021-08-03).
- [4] 後藤真. 日本における人文情報学の全体像と総合資料学. 国立歴史民俗博物館編. 歴史研究と〈総合資料学〉. 吉川弘文館, 2018, pp. 1-16.
- [5] 竹村彰通, 姫野哲人, 高田聖治編著. データサイエンス入門 第2版. 学術図書出版社, 2021, 227p.
- [6] 中山浩太郎監修. 東京大学のデータサイエンティスト育成講座: Python で手を動かして学ぶデータ分析. マイナビ出版, 2019, 448p.
- [7] “データサイエンス・カリキュラム標準案(専門教育レベル)の公開とご意見募集.”
https://www.ipsj.or.jp/annai/committee/education/public_comment/kyoiku20210215.html, (参照 2021-08-03).
- [8] Hirsch, B. D. (ed.) *Digital Humanities Pedagogy: Practices, Principles and Politics*. Open Book Publishers, 2012, 428p,
<https://www.openbookpublishers.com/product/161>, (参照 2021-08-03).
- [9] Battershill, C., Ross, S. *Using Digital Humanities in the Classroom: A Practical Introduction for Teachers, Lecturers, and Students*. Bloomsbury Publishing, 2017, 232p. See also,
<https://scalar.usc.edu/works/digital-humanities-in-the-classroom-a-practical-introduction/index>, (参照 2021-08-03).
- [10] Hepler, J. Digital History Comprehensive Exams Reading List. Humanities Commons,
<https://hcommons.org/deposits/item/hc:20099/>, (参照 2021-08-03).
- [11] “Advanced Degrees in Digital Humanities.” <https://github.com/dh-notes/dhnotes/blob/master/pages/dh-programs.md>, (参照 2021-08-03).
- [12] Harvard University. Introduction to Digital Humanities.
<https://online-learning.harvard.edu/course/introduction-digital-humanities?delta=2>, (参照 2021-08-03).
- [13] IHR Digital History Seminar. “Postgraduate Panel – Ngozi Edeagu (Bayreuth), Benjamin Pelling (King’s), Callum Booth (Sheffield).”
<https://www.youtube.com/watch?v=8EBv1N5F1Ss>, (参照 2021-08-03).
- [14] “JADH SIGLITH 第1回研究会「若手研究発表セッション」プログラム.” <https://www.jadh.org/siglith001>, (参照 2021-08-03).
- [15] Alliance of Digital Humanities Organizations. “DH 2020—Frequently Asked Questions: How do I present?”
<https://dh2020.hcommons.org/>, (参照 2021-08-03).
- [16] Alliance of Digital Humanities Organizations. “Multi-lingualism & Multi-Culturalism Committee.”
<https://adho.org/administration/multi-lingualism-multi-culturalism>, (参照 2021-08-03).
- [17] 人文情報学研究所監修. 欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識. 文学通信, 2021, p. 19.
- [18] Earhart, A. E. et al. Citational politics: Quantifying the influence of gender on citation in Digital Scholarship in the Humanities. *Digital Scholarship in the Humanities*, fqaa011, 2020,
<https://doi.org/10.1093/lc/fqaa011>, (参照 2021-08-03).
- [19] “オンライン学会—国保祥子／研究者＆ワーキングマザーの日々の雑感.” https://note.com/akiko_kokubo/n/n68ddd468270, (参照 2021-08-03).
- [20] 安川康介, 野村恭子. 日本の医学界におけるジェンダー平等について. 医学教育, 45(4), 2014, pp. 275-283.